

【表紙】

【提出書類】 四半期報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の7第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 平成26年11月12日

【四半期会計期間】 第99期第2四半期(自平成26年7月1日至平成26年9月30日)

【会社名】 東京テアトル株式会社

【英訳名】 TOKYO THEATRES COMPANY, INCORPORATED

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 太田 和宏

【本店の所在の場所】 東京都中央区銀座一丁目16番1号

【電話番号】 03(3561)8325

【事務連絡者氏名】 取締役執行役員管理本部長 松岡 毅

【最寄りの連絡場所】 東京都中央区銀座一丁目16番1号

【電話番号】 03(3561)8325

【事務連絡者氏名】 取締役執行役員管理本部長 松岡 毅

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所  
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

## 第一部 【企業情報】

### 第1 【企業の概況】

#### 1 【主要な経営指標等の推移】

##### 連結経営指標等

回次		第98期 第2四半期連結 累計期間	第99期 第2四半期連結 累計期間	第98期
会計期間		自 平成25年4月1日 至 平成25年9月30日	自 平成26年4月1日 至 平成26年9月30日	自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日
売上高	(千円)	7,835,026	7,415,067	15,650,506
経常利益又は損失( )	(千円)	45,483	184,955	330,639
四半期(当期)純利益	(千円)	1,748,017	126,655	834,571
四半期包括利益又は包括利益	(千円)	236,980	125,988	696,968
純資産額	(千円)	14,354,188	13,477,891	13,430,848
総資産額	(千円)	22,627,304	23,893,309	24,579,757
1株当たり四半期(当期)純利益金額	(円)	22.14	1.60	10.57
潜在株式調整後1株当たり 四半期(当期)純利益金額	(円)			
自己資本比率	(%)	63.4	56.4	54.6
営業活動による キャッシュ・フロー	(千円)	417,146	432,831	1,677,871
投資活動による キャッシュ・フロー	(千円)	14,442,961	376,763	8,127,826
財務活動による キャッシュ・フロー	(千円)	11,134,381	352,195	9,244,665
現金及び現金同等物の 四半期末(期末)残高	(千円)	7,170,801	2,844,315	4,006,106

回次		第98期 第2四半期連結 会計期間	第99期 第2四半期連結 会計期間
会計期間		自 平成25年7月1日 至 平成25年9月30日	自 平成26年7月1日 至 平成26年9月30日
1株当たり四半期純利益金額又は 四半期純損失金額( )	(円)	0.99	0.41

(注) 1 当社は四半期連結財務諸表を作成しておりますので、提出会社の主要な経営指標等の推移については記載しておりません。

2 売上高には、消費税等は含まれておりません。

3 潜在株式調整後1株当たり四半期(当期)純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

## 2 【事業の内容】

当社グループは、当社及び連結子会社7社の合計8社で構成されており、セグメントは、「映像関連事業」「飲食関連事業」「不動産関連事業」「その他事業」であります。

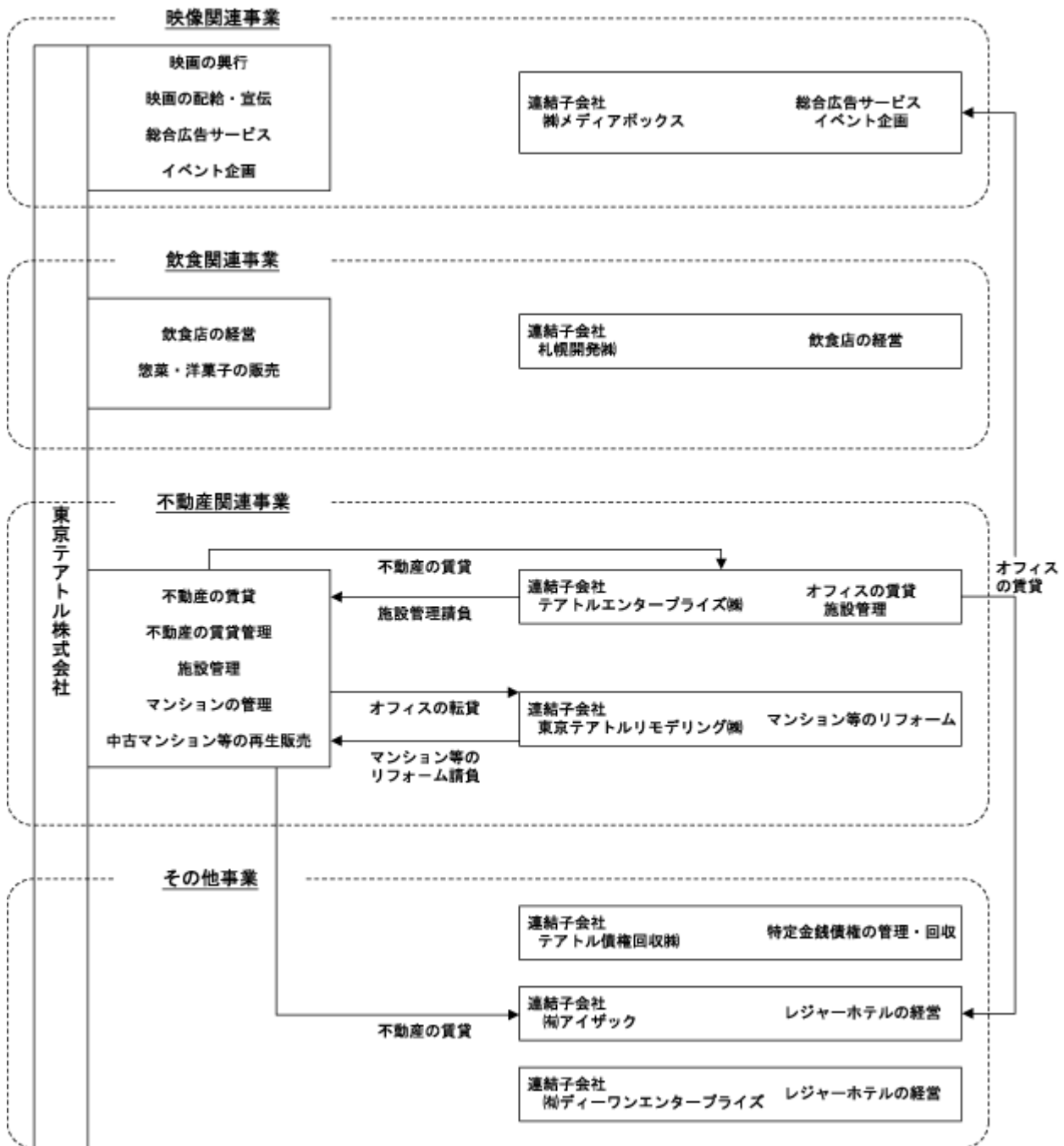
映像関連事業における広告事業は、業務領域を広げ、グループの経営資源を最大限活用して取引先企業の販売促進支援や顧客開発を提供するため「ソリューション事業」として再編し、事業名称を変更いたしました。

また「ホテル西洋 銀座」を運営しておりました株式会社エイチ・エス・ジーは平成26年5月21日をもって清算終了し、当社グループはホテル事業から撤退いたしました。これに伴いセグメント名称を従来のホテル飲食関連事業から飲食関連事業に変更いたしました。

当第2四半期連結累計期間の末日現在における当社グループと各セグメントとの関係は、次のとおりです。

セグメントの名称	主 な 事 業 内 容	会 社 名
映像関連事業	(映画興行事業) ・映画の興行 (映画配給事業) ・映画の配給・宣伝 (ソリューション事業) ・総合広告サービス ・イベント企画	当 社 株式会社メディアボックス
飲食関連事業	(飲食事業) ・飲食店の経営 ・惣菜・洋菓子の販売	当 社 札幌開発株式会社
不動産関連事業	(不動産賃貸管理事業) ・不動産の賃貸 ・不動産の賃貸管理 ・施設管理 ・マンションの管理 (不動産販売事業) ・中古マンション等の再生販売 ・マンション等のリフォーム	当 社 テアトルエンタープライズ株式会社 東京テアトルリモデリング株式会社
その他事業	(サービサー事業) ・特定金銭債権の管理・回収 (レジャーホテル事業) ・レジャーホテルの経営	テアトル債権回収株式会社 有限会社アイザック 有限会社ディーワンエンタープライズ

事業の系統図は次のとおりです。



## 第2 【事業の状況】

### 1 【事業等のリスク】

当第2四半期連結累計期間において、当四半期報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項の発生又は前事業年度の有価証券報告書に記載した「事業等のリスク」についての重要な変更はありません。

### 2 【経営上の重要な契約等】

当第2四半期連結会計期間において、経営上の重要な契約等の決定又は締結等はありません。

### 3 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中の将来に関する事項は、当四半期連結会計期間の末日現在において当社グループが判断したものであります。平成27年3月期第2四半期連結累計期間（平成26年4月1日～平成26年9月30日、以下「当四半期（累計）」といいます。）における当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況は次のとおりです。

#### (1) 業績の状況

当四半期（累計）におけるわが国の経済は、消費税率引き上げの影響により先行きの不透明さを残すものの、雇用・所得環境の改善が続き、緩やかな回復基調で推移しました。

このような経済環境のもと、当社グループは平成24年度を初年度とし平成26年度を最終年度とする中期経営計画「To The Next 2014」の達成に取り組みました。

当四半期（累計）の連結業績は、前年度に「ホテル西洋 銀座」が営業終了したことや消費税率引き上げの影響を受け不動産販売事業の売上が伸び悩んだことなどから売上高は7,415百万円（前年同期比5.4%減）となりましたが、前年度に取得した賃貸不動産3物件の収益が寄与したことなどから営業利益は138百万円（前年同期は営業利益4百万円）となり、経常利益は184百万円（前年同期は経常損失45百万円）となりました。また四半期純利益は、銀座テアトルビルの売却益を特別利益に計上した前年同期から大幅に減少し126百万円（前年同期比92.8%減）となりました。

#### 連結経営成績（百万円）

	前年同期	当四半期（累計）	増減
売上高	7,835	7,415	419
営業利益	4	138	+134
経常利益（は損失）	45	184	+230
四半期純利益	1,748	126	1,621

セグメント別の業績概況は以下のとおりです。

#### セグメント別売上高（百万円）

	前年同期	当四半期（累計）	増減
映像関連事業	1,627	1,571	55
飲食関連事業	3,029	2,867	162
不動産関連事業	2,564	2,267	297
その他事業	612	708	+95
計	7,835	7,415	419

セグメント別営業利益（百万円）

	前年同期	当四半期（累計）	増減
映像関連事業	32	31	63
飲食関連事業	38	56	+17
不動産関連事業	240	353	+113
その他事業	46	50	+3
調整額	353	290	+63
計	4	138	+134

<映像関連事業>

（映画興行事業）

『そのみにて光輝く』『チョコレートドーナツ』等が好成績を収めたものの、前年同期にアニメ作品の大ヒットがあったことから前年同期比で減収となりました。

当四半期末の映画館数及びスクリーン数は、9館23スクリーンです。

（映画配給事業）

前年同期よりも配給収入を計上した作品数は減少しましたが、モントリオール世界映画祭最優秀監督賞を受賞した『そのみにて光輝く』が大ヒットしたことから、前年同期並みの売上高となりました。

（ソリューション事業）

新規顧客の獲得等により受注が増加しましたので、前年同期比で増収となりました。

以上の結果、映像関連事業の売上高は1,571百万円（前年同期比3.4%減）となり、営業損失は31百万円（前年同期は営業利益32百万円）となりました。

<飲食関連事業>

（飲食事業）

平成26年4月に洋菓子店「パティスリー 西洋銀座」松屋銀座本店を、平成26年6月に都内ダイニング&バーの地中海パール2号店「アオヤマ・マルマーレ」を、平成26年8月に焼鳥専門店チェーン「串鳥」岩見沢店を出店したことに加え、各既存店も好調に推移したことから、前年同期比で増収となりました。

当四半期末における飲食店及び惣菜・洋菓子店の店舗数は下表のとおりです。

飲食店及び惣菜・洋菓子店の店舗数

	前年度末	当四半期末	増減
焼鳥専門店チェーン「串鳥」	34	35	+1
串焼専門店「串鳥番外地」	2	2	0
都内ダイニング&バー	4	5	+1
飲食店 合計	40	42	+2
惣菜・洋菓子店 合計	3	4	+1

前年度に営業終了した「ホテル西洋 銀座」の2カ月分の売上が計上されていることから飲食関連事業の売上高は2,867百万円（前年同期比5.4%減）となりましたが、「串鳥」の増益が寄与し営業利益は56百万円（前年同期比45.1%増）となりました。

## <不動産関連事業>

### (不動産賃貸管理事業)

前年度に銀座テアトルビルを売却したほか賃貸商業施設3事業所からも撤退したものの、前年度に取得した賃貸不動産3物件が順調に稼働したことから前年同期並みの売上高となりました。

### (不動産販売事業)

消費税率引き上げに伴う駆け込み需要の反動により不動産流通市場が低迷し、中古マンションの販売件数やリフォーム受注件数が減少したことから前年同期比で大幅な減収となりました。

以上の結果、不動産関連事業の売上高は2,267百万円(前年同期比11.6%減)となりましたが、賃貸不動産3物件の収益が寄与したことなどから営業利益は353百万円(前年同期比47.1%増)となりました。

## <その他事業>

サービス事業は大口債権の回収が前倒しで進んだことから前年同期比で大幅な増収となり、レジャーホテル事業は前年同期並みの売上高を確保いたしました。

以上の結果、その他事業の売上高は708百万円(前年同期比15.5%増)、営業利益は50百万円(前年同期比8.4%増)となりました。

## (2) 財政状態の分析

### (資産の部)

流動資産は、販売用不動産や買取債権が増加したものの、現金及び預金が減少したこと等により、前年度末と比較し626百万円減少し6,213百万円となりました。

固定資産は、有形固定資産及び無形固定資産が減価償却により減少したこと等により、前年度末と比較し59百万円減少し、17,679百万円となりました。

以上の結果、当四半期末における資産の部は、前年度末と比較し686百万円減少し23,893百万円となりました。

### (負債の部)

負債の部は、有利子負債が減少したこと等により、前年度末と比較し733百万円減少し10,415百万円となりました。

### (純資産の部)

純資産の部は、四半期純利益を計上していること等により、前年度末と比較し47百万円増加し13,477百万円となりました。

## (3) キャッシュ・フローの状況

当四半期末における連結ベースの現金及び現金同等物(以下、「資金」といいます。)は、前年度末より1,161百万円減少し4,006百万円となりました。各キャッシュ・フローの状況と主な要因は次のとおりであります。

### (営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動の結果、資金は432百万円の減少となりました。これは、税金等調整前四半期純利益181百万円に加え、減価償却費197百万円などの非資金項目の調整による増加、たな卸資産の増加238百万円による減少、その他の資産の増加498百万円による減少等によるものであります。

### (投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動の結果、資金は376百万円の減少となりました。これは、有形固定資産の取得312百万円があったこと等によるものです。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動の結果、資金は352百万円の減少となりました。これは配当金の支払79百万円に加え、有利子負債の減少273百万円があったこと等によるものです。

(4) 事業上及び財務上の対処すべき課題

中期経営計画とその進捗状況

当社は、平成24年度を初年度とし平成26年度を最終年度とする中期経営計画「To The Next 2014」を平成24年6月に策定し、その達成に取り組んでおります。

この中期経営計画は、銀座テアトルビルの売却を柱とし、その資金及び譲渡益によって、「オペレーション事業への回帰」「財務基盤の強化」「将来に向けた事業の選択と集中」の3つの基本方針の実現を目指すものです。

「オペレーション事業への回帰」とは、キャピタルゲインに依存した収益構造を改め、エンドユーザーと直に接することができる、映画興行事業や映画配給事業を中核とした映像関連事業、焼鳥専門店チェーン「串鳥」を中核とした飲食関連事業、中古マンション等の再生販売・マンション等のリフォームを中核とした不動産関連事業を本業と位置づけ、一定の投資を行い育成・強化を図っていくというものです。

「財務基盤の強化」とは、銀座テアトルビルの売却資金を活用し、事業規模に比して過大な有利子負債を大幅に圧縮し、支払利息の削減を図るとともに、投資余力を確保する等により今後の成長を支える財務基盤を獲得するというものです。

「将来に向けた事業の選択と集中」とは、賃貸商業施設運営事業等、不採算となっている事業や今後不採算化が予想される事業の早期撤退を図り、損失の圧縮を図っていくというものです。

3つの基本方針の具体的な内容と当四半期末までの進捗状況は以下のとおりであります。

) オペレーション事業への回帰

<映像関連事業>

[重点政策]

- ・ミニシアター興行網の整備（中期経営計画期間中の2館6スクリーンの新規出館）
- ・興行網を活かした配給事業の拡大（宣伝機能強化による配給作品1本当りの興行収入の増加）

映像関連事業 数値目標（百万円）

	平成24年度（実績）	平成25年度（実績）	平成26年度（予想）
売上高	3,409	3,437	3,250
営業利益	93	32	5

上表の売上高には、セグメント間の内部売上高又は振替高が含まれております。平成26年度につきましては最新予想数値です。

[当四半期末までの進捗状況と今後の課題]

(映画興行事業)

- ・全映画館へのデジタルシネマ映写機の導入（平成24年度～平成25年度）
- ・快適な映画鑑賞環境の整備の一環として「テアトル新宿」のロビー全面改装（平成25年度）
- ・「シネ・リーブル梅田」を2スクリーンから4スクリーンに増床（平成25年度）

今後は、顧客密着型の営業を強化し、優良作品の獲得、コンセッションの充実など映画館自体の付加価値づくりに取り組むとともに、引き続き新館出館を目指してまいります。

(映画配給事業)

- ・配給作品『それいけ！アンパンマン よみがえれバナナ島』がシリーズ歴代第2位（平成24年度）、『それいけ！アンパンマン とばせ！希望のハンカチ』が歴代第4位（平成25年度）となる興行成績を記録
- ・『アンパンマン』に次ぐシリーズ作品を目指すアニメ『映画 かいけつゾロリ』の第2弾を公開（平成25年度）



- ・優良作品獲得に向け宣伝部を新設するとともに出資を再開し、企画のクオリティと市場性の高い『まほろ駅前狂騒曲』などの作品を獲得（平成25年度）
- ・配給作品『そのみにて光輝く』がモントリオール世界映画祭最優秀監督賞を受賞（平成26年度）  
今後は、これまでの進捗を踏まえて、配給作品1本当りの興行収入の増加に向けて引き続き取り組んでまいります。

### （ソリューション事業）

- ・「広告事業の再編」を進め、業務領域を広げ「ソリューション事業」として再編し、グループの経営資源を最大限活用して取引先企業への販売促進支援や顧客開発の提供を開始しました。

### < 飲食関連事業 >

#### [重点政策]

- ・焼鳥専門店チェーン「串鳥」の拡大（中期経営計画期間中7店舗の出店と本州エリアにて工場の新設）
- ・新業態への挑戦（都内ダイニング&バー4店舗を運営するノウハウを活かした新業態の開発）
- ・「ホテル西洋 銀座」ブランドの継承による中食市場等への本格的な進出

#### 飲食関連事業 数値目標（百万円）

	平成24年度（実績）	平成25年度（実績）	平成26年度（予想）
売上高	7,588	5,728	5,700
営業利益	13	72	100

上表の売上高には、セグメント間の内部売上高又は振替高が含まれております。平成26年度につきましては最新予想数値です。

#### [当四半期末までの進捗状況と今後の課題]

##### （焼鳥専門店チェーン「串鳥」）

- ・6店舗（北海道5店舗、仙台1店舗）を出店（平成24年度～平成26年度）
- ・北海道内の需要増加に伴い札幌市に第3工場を設立（平成25年度）

今後は、新業態として平成26年11月26日に札幌市内に開店予定の串鳥のワイン酒場「タント」を軌道に乗せつつ、焼鳥専門店チェーン「串鳥」の北海道内の地方都市への展開を推進するとともに、本州エリアでの本格展開に向けた工場新設に引き続き取り組んでまいります。

##### （都内ダイニング&バー）

- ・地中海バー「トーキョー・マルマーレ」2店舗を出店（平成24年度～平成26年度）

今後は、地中海バー2号店を軌道に乗せ、さらなる店舗展開を進めてまいります。

##### （惣菜・洋菓子店）

- ・ホテル閉館後、「ホテル西洋 銀座」のブランドを継承し、惣菜・洋菓子の販売事業を立ち上げ（平成25年度）

- ・「パティスリー 西洋銀座」3店舗（東京都3店舗）を出店（平成25年度～平成26年度）

今後は、商品供給体制等運営体制の整備を図るとともに、販路の拡大にも取り組んでまいります。

<不動産関連事業>

[重点政策]

- ・中古マンション再生販売事業の育成
- ・保有資産の活用・入替による安定収益確保

不動産関連事業 数値目標（百万円）

	平成24年度（実績）	平成25年度（実績）	平成26年度（予想）
売上高	7,092	5,371	5,350
営業利益	459	386	750

上表の売上高には、セグメント間の内部売上高又は振替高が含まれております。平成26年度につきましては最新予想数値です。

[当四半期末までの進捗状況と今後の課題]

**（不動産販売事業）**

- ・資金効率を重視したマネジメントの実施により在庫期間を短縮（平成24年度～平成25年度）
  - ・お客様に想いのままの住まいを手に入れていただけるよう、「中古マンション取得」と「リノベーション」を合わせた新サービス「リノまま」を開始（平成25年度）
- 今後は、営業管理体制をより整備することで同事業のさらなる拡大を図るとともに、引き続き「リノまま」の育成・強化を図ってまいります。

**（不動産賃貸管理事業）**

- ・銀座テアトルビルの売却資金の一部を活用し賃貸不動産3物件（東京都港区2物件、東京都足立区1物件）を取得（平成25年度）
- 今後は、引き続き保有資産の有効活用等を進めてまいります。

) 財務基盤の強化

[重点政策]

- ・銀座テアトルビルの売却資金を活用した有利子負債の大幅圧縮、支払利息の削減

[当四半期末までの進捗状況]

- ・銀座テアトルビル売却資金の一部を活用し有利子負債を大幅に圧縮、支払利息も大幅に減少（平成25年度）

有利子負債の推移（百万円）

	平成24年度末（実績）	平成25年度末（実績）	平成26年度末（予想）
有利子負債	12,817	3,670	3,490

) 将来に向けた事業の選択と集中

[重点政策]

- ・賃貸商業施設運営事業の期間満了に向けた対応
- ・中期経営計画期間中に収益悪化の兆候が見られた事業からの撤退等の対応

[当四半期末までの進捗状況と今後の課題]

- ・「札幌クラブハイツ」の営業を終了しキャバレー事業から撤退（平成24年度）
- ・オーナーとの契約期間満了を迎えた賃貸商業施設運営事業の3事業所から撤退、残る2事業所についても損失を圧縮（平成25年度）
- ・「ホテル西洋 銀座」を運営していた株式会社エイチ・エス・ジーを解散しホテル事業から撤退（平成25年度）
- ・テアトルソフトウェア株式会社を解散しソフトウェア開発事業から撤退（平成25年度）

なお、当四半期経過後の平成26年10月に賃貸商業施設運営事業の1事業所からの撤退が完了したため、今後は、賃貸商業施設運営事業の残る1事業所の撤退に向けて引き続き取り組んでまいります。

）中期経営計画最終年度に向けて

上記のとおり、平成25年度末までに構造改革がほぼ一巡しつつあることから、中期経営計画最終年度の平成26年度は、「創造と革新～第二の創業として」を基本テーマに、それまでの構造改革中心の取り組みから、事業の成長に向けた取り組みに重心を移してまいります。

**[重点政策]**

- ・新規事業への積極的なチャレンジ
- ・既存事業における販路、セールスプロモーションなどの手法の見直し
- ・事業間連携の推進
- ・M & A や外部企業とのアライアンスの積極的な活用

平成26年度は、平成25年度までの重点政策の進捗状況や新規事業へのチャレンジ等を織り込み、下表の目標数値の達成を目指します。

平成26年度 目標数値（百万円）

	平成24年度（実績）	平成25年度（実績）	平成26年度（予想）
売上高	18,822	15,650	15,600
営業利益（ は損失）	166	210	250
経常利益（ は損失）	492	330	250
当期純利益（ は純損失）	617	834	100

**会社の支配に関する基本方針**

**）基本方針の内容の概要**

当社は、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者は、下記（ ）ア）記載の当社の事業特性を理解し、当社の企業価値ないし株主共同の利益を持続的に維持・向上させることができる者でなければならないと考えております。

当社は、当社株式の大規模買付行為がなされる場合、これが当社の企業価値ないし株主共同の利益に資するものであれば、これを一概に否定するものではありません。また、大規模買付行為を受け入れるか否かの判断は、最終的には株主の皆様によってなされるべきものであると考えております。しかしながら、株式の大規模買付行為の中には、取締役会や株主の皆様が株式の大規模買付行為について検討しあるいは取締役会が代替案を提案するための十分な時間や情報を提供しないものや、企業価値ないし株主共同の利益を著しく損なういわゆる濫用的買収と呼ばれるものも少なくはありません。当社は、このような大規模買付行為がなされる場合は必要かつ相当な対抗をすることにより、当社の企業価値ないし株主共同の利益を守る必要があると考えております。

**）基本方針の実現に資する特別な取り組みの内容の概要**

**ア）当社の企業価値の源泉について**

当社は、創業以来、「お客様の満足を自らの喜びとし、最高のサービスを提供する」ことを基本理念として掲げ、映画興行を中心として堅実な経営をしてまいりました。現在は、映画興行や映画配給を中核とした映像関連事業、焼鳥専門店チェーン「串鳥」の経営を中核とした飲食関連事業及び不動産の販売・リフォームや賃貸を中核とした不動産関連事業の3つを基幹事業とし、多角的かつ広範囲な事業展開を行っております。当社グループの事業は、永年蓄積された豊かな経験や専門知識、当社が築き上げた信頼とそれに基づく顧客やお取引先等との密接な関係、「お客様の満足を自らの喜びとし、最高のサービスを提供する」という基本理念の下に団結した魅力ある人材、事業の基盤となる保有不動産、永年営んできた映画興行事業等により醸成され広く浸透した「テアトル」のブランドイメージ等の経営資源の上に成立しております。そして、これらの経営資源は、それぞれが独立したものではなく、相互に有機的一体として機能することにより、更なる価値を生み出してきました。

#### イ) 企業価値向上への取り組み

当社は、平成24年6月20日付で第8次中期経営計画(「To The Next 2014」)を決定・公表し、企業価値の向上に取り組んでおります。

この中期経営計画は、銀座テアトルビルを売却し、その譲渡益及びキャッシュフローを活用し、強化・育成事業への再投資、有利子負債の圧縮による財務体質の健全化、不採算事業の整理を行い、本業であるオペレーション事業を成長事業の中核に据えた安定収益基盤確立へ向け、構造改革を進めるものです。その詳細につきましては、当社ホームページに記載の『第8次中期経営計画の策定について』を、またその進捗状況につきましては「中期経営計画とその進捗状況」をご参照下さい。

([http://www.theatres.co.jp/investor/pdf/2012\\_2014plan.pdf](http://www.theatres.co.jp/investor/pdf/2012_2014plan.pdf))

#### ウ) コーポレートガバナンスの強化に向けた取り組み

当社はコーポレートガバナンスの強化のため、取締役の任期を1年とするとともに、取締役5名のうち1名を社外取締役に、監査役4名のうち3名を社外監査役にしております。

また、内部統制システムにつきましては、取締役会において内部統制システムの整備に関する基本方針を定め、グループ全体で、コンプライアンス、財務報告の信頼性、業務の有効性・効率性、資産の保全を目的とした内部統制の整備に取り組んでおります。具体的には、内部統制委員会を設置し、全社的な内部統制を自己評価し、当社各部及び各子会社の内部統制の整備を支援するとともに、内部監査室を設置し、内部統制の整備状況・運用状況の評価を行っております。

#### 基本方針に照らして不適切な者によって当社の財務及び事業の決定が支配されることを防止するための取り組みの内容の概要

当社は、平成24年5月9日開催の取締役会において、平成21年5月12日開催の取締役会において決定し、同年6月25日開催の当社第93回定時株主総会で承認を得た「当社株式の大規模買付行為に関する対応方針(買収防衛策)」の3年の有効期限が満了することとなるため、これを一部改定(以下、改定後の対応方針を「本対応方針」といいます。)し存続することを決定し、平成24年6月26日開催の第96回定時株主総会において本対応方針について承認を得ております。本対応方針の詳細につきましては、インターネット上の当社ウェブサイトに掲載する平成24年5月9日付プレスリリース「会社の支配に関する基本方針並びに当社株式の大規模買付行為に関する対応方針(買収防衛策)の一部改定及び存続に関するお知らせ」をご覧ください。

([http://www.theatres.co.jp/investor/pdf/2012509\\_bouei.pdf](http://www.theatres.co.jp/investor/pdf/2012509_bouei.pdf))

#### 具体的な取り組みに対する当社取締役会の判断及びその理由

厳しい経済環境の中、上記(イ)記載の事業基盤の再構築を目指す第8次中期経営計画の策定とその達成への取り組み、及び上記(ウ)記載のコーポレートガバナンスの強化に向けた取り組みは、当社の企業価値・株主共同の利益の継続かつ持続的向上のための具体的取り組みです。また、上記(イ)記載の取り組みは、経済産業省及び法務省が平成17年5月27日に公表した「企業価値・株主共同の利益の確保又は向上のための買収防衛策に関する指針」の定める三原則(企業価値・株主共同の利益の確保・向上の原則、事前開示・株主意思の原則、必要性・相当性確保の原則)を充足するとともに、東京証券取引所の有価証券上場規則第440条に定める買収防衛策の導入に関する遵守事項(開示の十分性、透明性、流通市場への影響、株主の権利の尊重)を尊重するものであり、さらに、経済産業省に設置された企業価値研究会が平成20年6月30日に公表した「近時の諸環境の変化を踏まえた買収防衛策の在り方」その他の買収防衛策に関する実務・議論を踏まえた内容となっております。

以上のこと等から、当社取締役会は、いずれの取り組みも基本方針に沿うものであって、取締役の地位の維持を目的とするものではなく、当社の企業価値・株主共同の利益の向上に資するものであると考えております。

### 第3 【提出会社の状況】

#### 1 【株式等の状況】

##### (1) 【株式の総数等】

###### 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	200,000,000
計	200,000,000

###### 【発行済株式】

種類	第2四半期会計期間 末現在発行数(株) (平成26年9月30日)	提出日現在 発行数(株) (平成26年11月12日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	80,130,000	80,130,000	東京証券取引所 (市場第1部)	単元株式数は1,000株でありま す。
計	80,130,000	80,130,000		

##### (2) 【新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

##### (3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

##### (4) 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

##### (5) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金 増減額 (千円)	資本準備金 残高 (千円)
平成26年9月30日	-	80,130,000	-	4,552,640	-	3,573,173

## (6) 【大株主の状況】

平成26年9月30日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
三井住友信託銀行株式会社	東京都千代田区丸の内1-4-1	3,896	4.86
株式会社竹中工務店	大阪府大阪市中央区本町4-1-13	2,500	3.11
日本マスタートラスト信託銀行 株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2-11-3	1,964	2.45
サッポロビール株式会社	東京都渋谷区恵比寿4-20-1	1,700	2.12
日本トラスティ・サービス信託 銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海1-8-11	1,589	1.98
株式会社エルピー企画	東京都豊島区南池袋3-18-34	1,150	1.43
株式会社セゾンファンデックス	東京都豊島区東池袋3-1-1	1,100	1.37
損害保険ジャパン日本興亜株式 会社	東京都新宿区西新宿1-26-1	1,061	1.32
株式会社パルコ	東京都渋谷区神泉町8-16	907	1.13
大和証券株式会社	東京都千代田区丸の内1-9-1	877	1.09
計		16,744	20.89

(注) 当社は自己株式1,193千株(発行済株式総数に対する所有株式数の割合1.48%)を保有しておりますが、上記の大株主から除いております。

## (7) 【議決権の状況】

## 【発行済株式】

平成26年9月30日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 1,193,000		
完全議決権株式(その他)	普通株式 78,795,000	78,795	
単元未満株式	普通株式 142,000		
発行済株式総数	80,130,000		
総株主の議決権		78,795	

(注) 「単元未満株式」欄の普通株式には、当社所有の自己株式33株が含まれております。

## 【自己株式等】

平成26年9月30日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) 東京テアトル株式会社	東京都中央区銀座1-16-1	1,193,000		1,193,000	1.48
計		1,193,000		1,193,000	1.48

## 2 【役員の状況】

該当事項はありません。

## 第4 【経理の状況】

### 1 四半期連結財務諸表の作成方法について

当社の四半期連結財務諸表は、「四半期連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(平成19年内閣府令第64号)に基づいて作成しております。

### 2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、第2四半期連結会計期間(平成26年7月1日から平成26年9月30日まで)及び第2四半期連結累計期間(平成26年4月1日から平成26年9月30日まで)に係る四半期連結財務諸表について、大有ゼネラル監査法人により四半期レビューを受けております。



## 1 【四半期連結財務諸表】

## (1) 【四半期連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当第2四半期連結会計期間 (平成26年9月30日)
<b>資産の部</b>		
<b>流動資産</b>		
現金及び預金	4,085,506	2,934,315
受取手形及び売掛金	410,904	260,426
商品	27,837	32,709
販売用不動産	641,664	854,791
貯蔵品	10,914	23,559
繰延税金資産	51,731	60,728
買取債権	1,269,755	1,563,143
その他	663,840	863,249
貸倒引当金	321,379	379,136
流動資産合計	6,840,777	6,213,788
<b>固定資産</b>		
<b>有形固定資産</b>		
建物及び構築物（純額）	5,010,363	4,979,513
機械装置及び運搬具（純額）	54,972	58,893
工具、器具及び備品（純額）	225,388	228,421
土地	9,102,828	9,102,828
リース資産（純額）	136,618	126,676
有形固定資産合計	14,530,172	14,496,333
<b>無形固定資産</b>		
借地権	39,207	39,207
ソフトウェア	70,614	61,179
リース資産	1,881	1,596
その他	4,921	4,921
無形固定資産合計	116,625	106,905
<b>投資その他の資産</b>		
投資有価証券	2,115,475	2,102,982
長期貸付金	180	340
差入保証金	802,852	808,774
繰延税金資産	121,896	120,517
その他	272,415	257,552
貸倒引当金	220,637	213,884
投資その他の資産合計	3,092,182	3,076,282
固定資産合計	17,738,980	17,679,521
資産合計	24,579,757	23,893,309

(単位：千円)

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当第2四半期連結会計期間 (平成26年9月30日)
<b>負債の部</b>		
<b>流動負債</b>		
支払手形及び買掛金	714,972	626,016
短期借入金	70,000	60,000
1年内返済予定の長期借入金	664,180	537,286
リース債務	25,698	24,796
未払金	501,550	398,467
未払法人税等	222,476	126,350
前受金	91,127	125,765
繰延税金負債	1,304	703
賞与引当金	131,158	151,010
建物解体費用引当金	196,109	142,829
事業所閉鎖損失引当金	192,000	101,530
資産除去債務	160,000	160,000
その他	524,450	465,946
流動負債合計	3,495,028	2,920,701
<b>固定負債</b>		
社債	180,000	180,000
長期借入金	2,609,091	2,486,584
リース債務	121,403	111,992
長期未払金	12,534	12,534
長期預り保証金	2,068,348	2,062,612
繰延税金負債	884,820	827,513
再評価に係る繰延税金負債	990,187	990,187
退職給付引当金	623,346	-
役員退職慰労引当金	59,473	59,473
退職給付に係る負債	-	657,069
資産除去債務	104,676	106,749
固定負債合計	7,653,881	7,494,716
負債合計	11,148,909	10,415,417
<b>純資産の部</b>		
<b>株主資本</b>		
資本金	4,552,640	4,552,640
資本剰余金	3,737,647	3,737,647
利益剰余金	3,397,227	3,444,945
自己株式	237,126	237,135
株主資本合計	11,450,388	11,498,098
<b>その他の包括利益累計額</b>		
その他有価証券評価差額金	382,019	381,353
土地再評価差額金	1,598,439	1,598,439
その他の包括利益累計額合計	1,980,459	1,979,793
純資産合計	13,430,848	13,477,891
負債純資産合計	24,579,757	23,893,309

## (2) 【四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書】

## 【四半期連結損益計算書】

## 【第2四半期連結累計期間】

	(単位：千円)	
	前第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成26年4月1日 至平成26年9月30日)
売上高	7,835,026	7,415,067
売上原価	5,469,835	5,068,589
売上総利益	2,365,191	2,346,477
販売費及び一般管理費		
役員報酬	123,961	106,177
広告宣伝費	34,126	20,378
人件費	1,219,491	1,137,160
賞与引当金繰入額	90,268	104,542
退職給付費用	37,526	38,514
賃借料	168,265	171,691
水道光熱費	86,218	96,010
貸倒引当金繰入額	7,502	67,530
その他	593,732	465,641
販売費及び一般管理費合計	2,361,093	2,207,646
営業利益	4,098	138,830
営業外収益		
受取利息	642	206
受取配当金	39,216	38,826
協賛金収入	30,510	15,820
貸倒引当金戻入額	-	16,526
その他	12,260	9,779
営業外収益合計	82,629	81,159
営業外費用		
支払利息	124,077	25,721
借入関連費用	-	1,905
その他	8,133	7,407
営業外費用合計	132,211	35,034
経常利益又は経常損失( )	45,483	184,955
特別利益		
固定資産売却益	3,804,425	-
受取解約違約金	-	600
合意解約金	37,000	-
特別利益合計	3,841,425	600
特別損失		
特別退職金	33,640	-
固定資産除却損	23,094	4,066
減損損失	9,392	-
事業所閉鎖損失	274,869	-
解約違約金	67,000	-
借入金繰上返済精算金	10,620	-
特別損失合計	418,618	4,066
税金等調整前四半期純利益	3,377,322	181,489
法人税、住民税及び事業税	1,881,264	108,653
法人税等調整額	251,959	53,819
法人税等合計	1,629,305	54,834
少数株主損益調整前四半期純利益	1,748,017	126,655
四半期純利益	1,748,017	126,655

【四半期連結包括利益計算書】

【第2四半期連結累計期間】

(単位：千円)

	前第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成26年4月1日 至平成26年9月30日)
少数株主損益調整前四半期純利益	1,748,017	126,655
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	117,821	666
土地再評価差額金	1,628,858	-
その他の包括利益合計	1,511,037	666
四半期包括利益	236,980	125,988
(内訳)		
親会社株主に係る四半期包括利益	236,980	125,988

## (3) 【四半期連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成26年4月1日 至平成26年9月30日)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		
税金等調整前四半期純利益	3,377,322	181,489
減価償却費	189,992	197,287
減損損失	9,392	-
貸倒引当金の増減額(は減少)	7,525	51,004
賞与引当金の増減額(は減少)	4,231	19,851
退職給付引当金の増減額(は減少)	4,042	-
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	-	33,723
役員退職慰労引当金の増減額(は減少)	68,306	-
事業所閉鎖損失引当金の増減額(は減少)	-	90,470
受取利息	642	206
受取配当金	39,216	38,826
支払利息	124,077	25,721
固定資産除却損	21,678	383
固定資産売却損益(は益)	3,804,425	-
商品評価損	671	7,559
出資金運用損益(は益)	4,421	5,380
事業所閉鎖損失	20,404	-
たな卸資産の増減額(は増加)	239,568	238,201
売上債権の増減額(は増加)	285,395	150,477
仕入債務の増減額(は減少)	147,544	88,956
その他の資産の増減額(は増加)	1,238,733	498,192
その他の負債の増減額(は減少)	516,382	31,089
小計	471,804	250,884
利息及び配当金の受取額	39,859	39,032
利息の支払額	70,618	23,346
法人税等の支払額	23,897	197,632
営業活動によるキャッシュ・フロー	417,146	432,831
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
投資有価証券の売却による収入	1,007	120
短期貸付金の増減額(は増加)	210	-
長期貸付けによる支出	140	1,400
長期貸付金の回収による収入	132	430
有形固定資産の取得による支出	276,007	312,034
有形固定資産の売却による収入	14,418,475	-
有形固定資産の解体による支出	-	53,279
無形固定資産の取得による支出	3,899	-
無形固定資産の売却による収入	365,380	-
資産除去債務の履行による支出	53,597	-
出資金の払込による支出	4,000	-
定期預金の預入による支出	4,600	12,600
定期預金の払戻による収入	-	2,000
投資活動によるキャッシュ・フロー	14,442,961	376,763

(単位：千円)

	前第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成26年4月1日 至平成26年9月30日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額（は減少）	3,237,334	10,000
長期借入れによる収入	80,000	150,000
長期借入金の返済による支出	7,864,495	399,401
リース債務の返済による支出	35,001	13,722
自己株式の取得による支出	67	8
配当金の支払額	77,482	79,063
財務活動によるキャッシュ・フロー	11,134,381	352,195
現金及び現金同等物の増減額（は減少）	3,725,727	1,161,791
現金及び現金同等物の期首残高	3,445,074	4,006,106
現金及び現金同等物の四半期末残高	7,170,801	2,844,315

【注記事項】

(四半期連結キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の四半期末残高と四半期連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前第2四半期連結累計期間 (自 平成25年4月1日 至 平成25年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自 平成26年4月1日 至 平成26年9月30日)
現金及び預金	7,241,601千円	2,934,315千円
預入期間が3か月超の定期預金	70,800千円	90,000千円
現金及び現金同等物	7,170,801千円	2,844,315千円

(株主資本等関係)

前第2四半期連結累計期間(自 平成25年4月1日 至 平成25年9月30日)

1 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成25年6月27日 定時株主総会	普通株式	78,938	1.00	平成25年3月31日	平成25年6月28日	利益剰余金

(2) 基準日が当第2四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第2四半期連結会計期間の末日後となるもの

該当事項はありません。

2 株主資本の著しい変動に関する事項

該当事項はありません。

当第2四半期連結累計期間(自 平成26年4月1日 至 平成26年9月30日)

1 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成26年6月27日 定時株主総会	普通株式	78,937	1.00	平成26年3月31日	平成26年6月30日	利益剰余金

(2) 基準日が当第2四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第2四半期連結会計期間の末日後となるもの

該当事項はありません。

2 株主資本の著しい変動に関する事項

該当事項はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前第2四半期連結累計期間(自平成25年4月1日至平成25年9月30日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位:千円)

	報告セグメント					調整額 (注)1	四半期連結 損益計算書 計上額 (注)2
	映像関連 事業	ホテル飲食 関連事業	不動産関連 事業	その他 事業	合計		
売上高							
外部顧客への売上高	1,627,356	3,029,825	2,564,981	612,863	7,835,026	-	7,835,026
セグメント間の内部売上高 又は振替高	5,652	709	167,660	-	174,021	174,021	-
計	1,633,008	3,030,534	2,732,641	612,863	8,009,048	174,021	7,835,026
セグメント利益又はセグメント 損失( )	32,346	38,770	240,479	46,416	358,012	353,914	4,098

(注)1 セグメント利益の調整額 353,914千円には、各報告セグメントに配分していない全社費用353,014千円及びその他の調整額900千円を含んでおります。全社費用は主に報告セグメントに帰属しない一般管理費であります。

2 セグメント利益は、四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

2. 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報

(固定資産に係る減損損失)

「不動産関連事業」及び「ホテル飲食関連事業」の一部資産グループにおいて、保有する固定資産について減損の兆候が認められたため、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。なお、当第2四半期連結累計期間における減損損失の計上額は、「不動産関連事業」において4,052千円、「ホテル飲食関連事業」において5,340千円であります。



当第2四半期連結累計期間(自平成26年4月1日至平成26年9月30日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位：千円)

	報告セグメント					調整額 (注)1	四半期連結 損益計算書 計上額 (注)2
	映像関連 事業	飲食関連 事業 (注)3	不動産関連 事業	その他 事業	合計		
売上高							
外部顧客への売上高	1,571,932	2,867,416	2,267,601	708,117	7,415,067	-	7,415,067
セグメント間の内部売上高 又は振替高	3,242	55	41,589	-	44,887	44,887	-
計	1,575,174	2,867,472	2,309,190	708,117	7,459,954	44,887	7,415,067
セグメント利益又はセグメント 損失( )	31,176	56,237	353,627	50,299	428,987	290,157	138,830

(注)1 セグメント利益の調整額 290,157千円には、各報告セグメントに配分していない全社費用289,729千円及びその他の調整額427千円を含んでおります。全社費用は主に報告セグメントに帰属しない一般管理費であります。

2 セグメント利益は、四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

3 ホテル事業から撤退したことに伴い、当連結会計年度より、セグメント名称を「ホテル飲食関連事業」から「飲食関連事業」に変更しております。

2. 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

1株当たり四半期純利益金額及び算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成26年4月1日 至平成26年9月30日)
1株当たり四半期純利益金額(円)	22.14	1.60
四半期連結損益計算書上の四半期純利益金額 (千円)	1,748,017	126,655
普通株主に帰属しない金額(千円)	-	-
普通株式に係る四半期純利益金額(千円)	1,748,017	126,655
普通株式の期中平均株式数(株)	78,937,986	78,937,018

(注) 潜在株式調整後1株当たり四半期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

## 2 【その他】

該当事項はありません。

## 第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

## 独立監査人の四半期レビュー報告書

平成26年11月12日

東京テアトル株式会社  
取締役会 御中

大有ゼネラル監査法人

代表社員 業務執行社員	公認会計士	坂野英雄	印
社員 業務執行社員	公認会計士	新井努	印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、「経理の状況」に掲げられている東京テアトル株式会社の平成26年4月1日から平成27年3月31日までの連結会計年度の第2四半期連結会計期間(平成26年7月1日から平成26年9月30日まで)及び第2四半期連結累計期間(平成26年4月1日から平成26年9月30日まで)に係る四半期連結財務諸表、すなわち、四半期連結貸借対照表、四半期連結損益計算書、四半期連結包括利益計算書、四半期連結キャッシュ・フロー計算書及び注記について四半期レビューを行った。

### 四半期連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して四半期連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない四半期連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した四半期レビューに基づいて、独立の立場から四半期連結財務諸表に対する結論を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に準拠して四半期レビューを行った。

四半期レビューにおいては、主として経営者、財務及び会計に関する事項に責任を有する者等に対して実施される質問、分析的手続その他の四半期レビュー手続が実施される。四半期レビュー手続は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して実施される年度の財務諸表の監査に比べて限定された手続である。

当監査法人は、結論の表明の基礎となる証拠を入手したと判断している。

### 監査人の結論

当監査法人が実施した四半期レビューにおいて、上記の四半期連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して、東京テアトル株式会社及び連結子会社の平成26年9月30日現在の財政状態並びに同日をもって終了する第2四半期連結累計期間の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を適正に表示していないと信じさせる事項がすべての重要な点において認められなかった。

### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

(注) 1. 上記は四半期レビュー報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(四半期報告書提出会社)が別途保管しております。

2. XBRLデータは四半期レビューの対象には含まれていません。